

月刊

いじろのとも

第四卷

八月号

謙讓の美德

日本の社会は

謙讓の美德が

尊重される社会

なにもありませんが

あめしあがりください

つまらないものですが

どうぞお受け取りください

これは

本当は

自分がへりくだって

相手をたてる

サービス精神の

あらわれ

言葉だけに

終わらせたくない

七難かくす

世の中は

人と人との

お付き合い

変わらぬ笑顔

七難かくす

生きがいを感じたい人は

七、人様にはもうけさせよう。

私たち人間が、最低限、生活を営んで行くには、少なくとも、いのちをつなぐ生活物質が必要です。いわゆる衣食住を満たす物資です。時々、日本でも天災が起こり、寝るところもなく、着るものもなく、食べるものもなくなつて、いろいろなところから救援物資を送ってもらふ様子が、テレビで報道されます。架設住宅を立て、取り合えず着るものをそろえ、水や食料を確保するところが写し出されます。

こうした、生活に必要な物資を調える行為を経済行為と呼びますが、人間は、しかし、災害時のように経済行為を最低限で満足することはできません。架設住宅よりも、もっと立派な家が欲しくなりますし、大げさに言えば、着るものもテレビ司会者のように、毎日変えたくありません。また、食べるものも、必要以上に美味しいものをたらふく食べたくなってきます。それだけではありません。さらに、将来の経済生活のために、蓄えておきたくなつてきます。高ければ、利息だけで食べていけるようにしたくなつてくる人もいますでしょう。また、困った

ことに人間は、自分が一生、食べていけるだけ蓄えても、さらに子孫のために貯めたくなくなつてきますし、人に較べて、自分の方が多く貯めたくなくなつてきます。いわゆる分限者（ぶげんしゃ）と人から言われるようになりたいと思ふものです。難儀なものです。

でも、人はそんなことをしても決して幸せにはなれないことは、もう何度も書いてきた通りです。どれほどお金をため、財産を蓄えようと、栄枯盛衰は世のならないのです。どんな立派なお家も、どんな立派なお墓も、必ず、いつの時がお守りする人もなくなり、荒れ果てて山の中に埋もれ、耕されて畑となつていくものです。

ですから、経済の追求はほどほどにしたいものです。経済的な富（や資源）は、無限にあるわけではありません。誰かが多く取れば、誰かが少なくなります。欲張つてはなりません。

人間は、経済のことだけを考えれば、少しでも自分が多くとることを考えてしまいます。でも、人間は無人数で、一人孤立して生活していません。人間という字を見れば分かりますように、私たちは、「人間の」で、人と人の相互相依の中で生活しているのです。

これも何度も書いてきたと思いますが、人は人を超えたものを体感（解脱）しない限り、人と心を通わせる以

外に自分を心理的に安定させることは出来ません。それは、一人孤立しては、自分の中に自分を統合し、組織化する原理を持つことが出来ないからです。

そうなりますと、人は自分に利益を与えてくれる人を、どんな人でも善い人と思ってしまう。どんなにエゴイステイックな人でも、自分に利益や好意や善意を与えてくれれば、その人は善い人なのです。決して、その人を正しくみることは出来ません。それは自分自身が客観的に見えていないということでもあるのです。自分に執らわれがあるということでもあるのです。自分が統合できていないということでもあるのです。他者の言葉や行為をまっぴらで、始めて自分が統合できるといっわけです。安心できるわけです。悲しいかな「超越者」を体感しない限り、多かれ少なかれ程度の差はあっても、誰でもがそうなのです。

もちろん、人に与えることしか考えない「解脱者」がこの世に多くすることが、全体としてこの世を善くしていく道ですが、しかし、それはなかなか難しいことです。そう急にすることはできません。今のような教育体制では、殆ど期待できません。そうなりますと、この世で出来るだけ多くの人が、幸せや生きがいを感じるようになるにはどうしたらよいか、次善の策として、それを考え

ねばなりません。

それが、ここで述べています「人様にはもうけさせよう」なのです。仏教の教えに「お布施」があります。それは自分の大切な物（お金）や労力を人に与えることです。それをすることが自分の功徳を積む行為で、見返りを期待してはいけません。お布施してやったとか、だからお返しや見返りが何かあるはずだと思つた途端にそれはお布施ではなくなり、取引に変わって行きます。

「人様にはもうけさせよう」というのは、お布施まではいきませんが、取引をする時にも、お布施の心を發揮して、自分だけが経済的・社会的な得をするのではなくて、相手の立場にたつて、出来るだけ相手をもうけさせるようにしてあげるべきことを言っているのです。

先ほど述べましたように、人は、自分に好意や経済的・社会的利益（贈り物も入る）をくれる人は善い人だと思つてしまいます。もうけさせてくれる人は善い人だということ。人は善い人だと思ふ人と接しますと、自分の精神的安定が得られます。あの人が自分に好意を持っているということ、自分の安定が得られるのです。そうなりますと、利益を与えた人も、利益を受けた人が善い人だと思つてくれるわけですから、その人の自分に対する行動も好意的になり、自分も安定することが

出来るのです。自分の取り分を少し控えることによって、相手だけではなくて、自分の精神的安定も得ることが出来るというわけです。

そうなりますと、社会全体として皆がそうするわけですから、社会の幸せは増えていくと思います。自分のエゴを少し控えて、人にももうけさせてあげるだけでいいのです。

自作詩短歌等選

料理は鮮度

料理は

鮮度

材料も

鮮度なら

作ったものも

鮮度

幸せに

なるうと思わば

人間も

日々にこころの

鮮度を保て

三位一体と必要条件

フランス革命の

三位一体は

自由・友愛・平等

しかし

自由には

法・戒律に伴う

責任がある

友愛には

布施・忍辱の心の

奉仕がある

平等には

禅定による超越との

一体体験がある

そしてこれらを

実行しようとする

精進がいり

最後に

それらを統合する

智慧がある

動物愛護の矛盾

動物を愛護せよ

と言うのに

人間の愛護すら

できていない

欧米の文明

動物を愛護せよ

と言うのに

平気で肉食を

続けている

欧米の文明

クモの生活

便所の片隅に
クモが
巣を張っている
毎日
見ていると

獲物のハエを
捕ったこともあるが
最近是不作のようだ
でも
ひたすら
クモの糸を増やして
じっと
待っている

人間も

いまやるべきことを
ひたすら
やっていたら
いつか幸せという
獲物が
必ず
捕まる

心の垢

子どもの頃につけた
心の垢は
大人になっても
なかなか落ちない
磨くことさえ
思いつかないほど
垢がこびりついて
しまっているから

振りをしていたら

自分をころして
人に尽くす振りを
していたら
自分がなくなつた

人を無視して
暗くする振りを
していたら
本当に暗くなつた
人間の主体性って
何なの

無明とは

無明とは
くらいということ
明かりがないということ
何も見えないということ
目では見えていても
こころのまなこが
見えないということ
人の道が
仏の道が
見えないということ
こころのまなこを
磨こう
毎日まいにち
磨こう
そして
無明から
脱しよう

自作随筆選

知ることとは成ること

仏教では、知るとは成ることではなくてはならないと言います。とても善い言葉だと思えます。

人間は毎日生きていますが、しかし、それは毎日死んでいることでもあるのです。一日生きれば、一日寿命が短くなる、つまり一日死んで行っているのです。この一日を一秒に縮めても話は同じです。仏教では、時間の最小単位を秒ではなくて、刹那(せつな)と呼びますので、人間は刹那に生きて、刹那に死んでいると言えます。言うまでもないことですが、死ぬことと生きることとは矛盾していません。形式論理学では、死は生ではありませんし、生は死でもないので、なに、生きていることは死んでいることになるのです。

ここに、「人間」を始め「生命」や「物質」のような、この世に存在する相対なもの、基本的矛盾が存在しているのです。人間は、ただそれを意識することが出来る点で他の存在と根本的に異なっているだけなのです。

このように人間は基本的に矛盾を含んで、常に生から死に向かって運動し、変化しています。大多数の人は、それを意識する時、不安になり、苦しみ、あがき、多く

の過ちを犯して、遂には死んで成仏していくのです。

実は、この運動を捉える言葉が、「知るとは成ること」と言う、その「成る」という言葉なのです。ですから、常に人間は成っていることになりません。それは人間だけではなくて、この世に存在するあらゆるものが成っているのです。先程、触れましたように、人間だけがそのことを意識することが出来るのです。

実は、この意識するというところに、人間の苦しみの根源もあり、そこから救われる道もあるのです。

人間は意識することで、動物にはない自由を手に入れました。自分の意志によって行動する余裕が生じたのです。自分がこうこうしたいと思うことが出来るようになったのです。でも、自由を手に入れた代償として、実は、自分の自由にならないことまでも自由にしたと思うてしまふ傲慢さをも同時に背負わされてしまったのです。ここに人間の苦しみの根源が存在するのです。

相対なもの、宿命として、いくら意識を手に入れようとも、意識して自分が成ることをやめるわけにはいかなのです。自分の意志に反して、いやがおうでも成ってしまうのです。死に向かって突進させるをえないのです。普段、日常生活の中で多くのことが自分の意志どおりになっっているときは、このことを忘れていますが、何か事

件や事故が起こりますと「成らざるを得ない無力さ」をしみじみと感じてしまうのです。そして、多くの人は悲しみ、苦しみ、あがき、自分以外の多くの人を巻き込んで、自分が不幸を感じるだけではなく、人をも不幸に巻き込んでしまうのです。

このように、成ることを人間は避けることは出来ません。何が何でも成らざるを得ないのです。ですから、人間は成るべくして生まれて来ていると言えます。つまり、大多数の人は、いやいや成ることを繰り返しながら、年老いて死に至り、いわゆる成仏するわけです。ところが、有り難いことに精進さえすれば、死なないで成って、成仏する道が人間だけには用意されているのです。空海上人はそれを即身成仏と言われました。ここに人間が死に向かつて突進しているにもかかわらず、それを超えて不死に至る道があるのです。

表題の「知ることとは成ること」と言いますのは、このことを言っているのです。それは、いわゆる学者が客観の世界を研究対象として知るのではありませんし、あるいは一般の人が本や新聞を読んだり、人から話を聞いたりして知るのでもないのです。そうではなくて、ここで言う知ることとは、知識ではなくて、知恵のことなのです。ソクラテスが「無知の知」と言った、知に当たって

いるのです。

大多数の人が、無知なことの例をあげてみますと、人間はどこから生まれてきて、どこへ死んでいくかを知りません。また、自分が心に執らわれの垢をいっばい付けていることも知りません。どんな外的な事柄や出来事にも乱されない安心立命の境地があることも知りません。仏さまと一体になる世界を知りません。自分の命にさえ執らわれなくてもよい世界を知りません。たとえ食べるものがなくても、毎日のようにこみ上げてくる生きる喜びを知りません。誰に愛されなくても、人を愛する喜びを知りません。自分の中からこみ上げてくる恍惚の世界を知りません。自分自身の欲望を自由にコントロールできる世界を知りません。

これらのことに、普通の人は無知なのです。人生で人間が最高の幸せを実現するために最も大切なことを何も知らないのです。こうしたことを知ることを知知の知といふのです。それは、ただ、そういう世界があることを頭で知ればよいものではありません。知った上にそう成らなければ意味がないのです。

卑近な例で言いますと、在家勤行式の十善戒（不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見）をいく

ら毎日読んでいて、その内容をよく知っていても、実生活でそれに反したことをすれば、成ったとは言えないわけです。知っても成ってはいないのです。仏教の、その他のどんな教えも、常にこうした実践性が要求されているのです。

有り難いことに、宗教は、実践の中で誰でもがそうなる道を、私たちに示してくれています。仏教でも、キリスト教でも、道教でも、みな同じなのです。その道とは、前述の世界を「頭」で知るだけではなくて、「体」と「心」と「魂」の全てで知る道なのです。人間の精神の全てで知る道なのです。そうして知って成った結果を、仏教では「般若の知恵」と呼んでいます。

そうなりますと、既に成仏して自分の執らわれを超えていますから、全てにおいて真の自由自在を得、日常的に成ることを繰り返す現実生活が、道元の言う「現成」となり、もはやどんな悪も犯さなくてよくなって来るのです。そうなるには、しかし、現代人のように頭だけで何でも納得するのではなくて、体を使って行う修行、精神修養があると、私は思うのです。

これが表題の意味なのです。

釈尊のじゆば（一四）

（五五）梅檀（せんだん）、タガラ、青蓮華、ヴァツシキー これら香りのあるものどものうちでも、徳行の香りこそ最上である。

（五六）タガラ、梅檀（せんだん）の香りは、かすかであって、大したことはない。しかし徳行ある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。

前の（五四）で、花の香りは風にさからって進んでいかないが、徳のある人々の香りは、風にさからって、全ての方向に薫っていく、ということを取り上げていました。この二つの偈も、それと同様の趣旨のものです。

いま世界で「徳行」の人と言えるのは、マザー・テレサさんではないかと思えます。余談ですが、日本にも来られたことがあり、日本は障害児・者のもつとも住みにくい国だと、何故か言い残して去られました。

今はインドで、主にハンセン病者の救済に当たっております。賞にこだわるのは嫌いですが、その功績によってノーベル平和賞をもらわれたと思います。

この方はキリスト教の信奉者で、キリストの愛（アガペーと言います）を實踐されています。この方を紹介する本は、世界中でたくさん出ています。日本でも翻訳されたり、日本人の書いたものも出版されています。

インドでは、カースト制という身分制度が今も完全な姿で残っています。乞食は代々乞食で、もらいを多くするために、赤ん坊の時、手足を切断さえするそうです。

こんな具合ですから、ハンセン病の治療も貧しさのため、殆どなされていません。道路には乞食があふれているだけではなくて、ハンセン病の患者もここに寝ころがって死を待っているそうです。

このハンセン病に罹った人は、日本でも昔は、不治の病ということ、だから感染させるのではないかという恐れ、そんなことになれば家系の血統が悪くなるという社会的圧迫感などのために、家族から身を隠し、川原で乞食をして暮らしたようです。ついでですが、鎌倉時代それを救ったのが、あの忍性（にんしょう）菩薩でした。

今年の二月号と昨年の三月号で少しふれた通りです。

マザー・テレサさんも、道路に横たわっているハンセン病の人を施設に運び、自らの手で傷のうみを洗い、手当てをしてあげるそうです。財源は皆さんの浄財によるようです。徳行の香りが、自然に人の心を動かし、そう

した浄財の寄付につながっていくのだと思います。

日本にもまだ、こうした人への偏見が残っているようですので、念のために申しますと、日本には、いまハンセン病は殆どありませんし、なっても治ります。また、たとえ傷に触っても、感染することは殆どありません。肺炎がうつらないようなものだそうです。

（五七）徳行を完成し、つとめはげんで生活し、正しい智慧によつて解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

ここで、あらためて徳とは何か、私なりの考えを述べておきたいと思えます。少し理屈っぽくなりますが、ここに書いてあることを理解する助けになると思いますが、辛抱して頂きたいと思えます。

昨年十月号の本誌を持っておられる方は、二頁から五頁をご覧頂きたいと思えます。そこに、私の「人間『精神』の心理学モデル（考え方）」の表が載っています。最近書いた論文で、私はこの考え方のことを「自己・他己理論」と呼ぶことにしました。

それはさておき、表の右端は、「自我 人格」という精神機能です。日本語で私はこの働きを「たましい」の

働きと言っています。具体的には、それ以下の「あたま（口）」と「からだ（身）」と「こころ（意）」の働きを「統合」する働きをしています。また、今日の自分と昨日の自分が「一貫」して同じ自分だと思える働きや、人生の「目的」を能動的に追求していく働きもしています。

この、いま述べた目的ですが、私はソクラテスの生き方から、自己の側の目的として「人間は自分自身を知ることを目指して、より善く生きる存在である」とし、自己の側の目的として「人間は法を目指して、より善く社会的であろうとする存在である」としました。この二つの目的は、人格が完成したとき、つまり解脱したとき統合されます。そして、この「自我 人格」の働きを育てる目標として私は「徳性」という言葉を使っているのです。

それは、より善く二つの「目的」を達成しようと思っているか、それに向かって身口意（しんくい）の働きをより善く「統合」できているか、常に「一貫」してより善く努力しているか、を問うものです。徳性が高いということは、これらの条件を満たしている、ということになるのです。

この偈に歌っていることも、実は、同じことなのです。偈にいう「徳行を完成」するということも、常に「つと

めはげんで生活」ということも、「正しい智慧によって解脱」ということも、私のいう「徳性」の条件を完全に満たしているということなのです。

そういう徳性の高い人には、「悪魔も近づくと理由や因縁が生じないということなのです。なお、悪魔ですが、これまで何度も出てきましたように、これは煩惱の誘惑ぐらいに思って頂ければよいと思います。

（五八）大道に棄てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまづみ）の中から香ぐわしく麗しい蓮華が生ずるように。

（五九）塵芥（ちりあくた）にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあつて、正しくめざめた人（ブツダ）の弟子は、智慧もて輝く。

いまの時期、朝、鳴門に行きますと、蓮華の淡い淡いピンクの花が、見渡す限り一面の青い、つるつるとした葉っぱの上に、言葉では言い表せないほど、どこまでも清楚に、点々と咲いています。ああ、これが釈尊のお好きだった蓮華の花なのかと、ただ眺めているだけで、どれほど心が洗われるかしれないほどです。

仏教では蓮の花が、色々なところによく用いられています。私の修行した密教でも、お祈りの「念誦次第」に出てきます。たとえば、次のような文句を唱えながら、心をそれに集中するのです。「一切の法は、本性清浄なること、蓮華の汚泥に染ぜざるが如し。われ又、三業清浄なることを獲得す。」

まさしく、汚泥の中から出てきているのに、あの鳴門で見るような、美しい葉と美しい花は、自分のつかっている、あの汚い、臭いさえが漂って来そうな泥とは無縁のものに思えてきます。でも、そこから出てきて、ここにとどまっていることは、確かなのです。

ここに、修行して解脱に至った人を表すのに蓮華の花が愛好される理由があるのです。偈にありますように、塵芥にも似た、人間の生きる実存が見えない凡夫の間から出てきて、それに汚染されず、目醒め覚醒して、美しい花を咲かせ、智慧によって輝いているのです。そして、超越はしていますが、そこに止まっていて、そこを美しく飾り、照らしているのです。

ここで、もう何度も書いたと思うのですが、智慧のことに少し触れておきたいと思います。

多くの人は智慧がある人と言え、**「あたま」**の良い人、**「あたま」**の切れる人と思うようです。

そうではないのです。智慧があるというのは、**「あたま」**の善し悪しではなくて、**「あたま」**の「こころ」を無視するようなこと（人を犯すか犯さないかということ）なのです。していいこと・しなくてはならないこと（善業）と、してはいけないこと（悪業）の判断を誤らないということなのです。もっと言いますと、したいことをしても「人のみち」、つまり「仏のみち」に外れないということなのです。

そうなるためには、直観力が大切になります。考える分かるのではだめなのです。してはいけないことは、なんとなくしたくないのです。また、しなければならぬことは、なんとなくしたくないのです。理由を意識してそうするのではないのです。理屈を考えてそうするのではないのです。

ですから、智慧が得られるかどうかには、**「あたま」**の善し悪しは、関係ありません。それに関係するのは、主に「こころ」であり、「たましい」なのです。ひたすら、智慧を得ようとする根性なのです。

後記

一、雨がよく降って困っています。山にある私の家の水

源地が流されたり、水道管が詰まったり、納屋の後ろの
 がけが少し崩れたり、家に来る途中の道路が地滑りして、
 通行止めになったりで、さんざんです。

二、道路は、ここから約四百メートルばかりのところ
 が地滑りし、道路に亀裂と隆起が見られます。割れ目を避
 けて歩くことは出来ませんが、これ以上降れば崩れてしま
 う危険もあるように見えます。自動車は、そこからもつ
 と下の空き地に止めさせて頂き、そこから歩いて行き来
 しています。

三、かつて、ヨーガの講習会をこの山城町でしたことが
 ありますが、その受講者で本誌の愛読者の方が、最近こ
 こへお参りして下さい、その後、二年目に入ってもず
 っとヨーガを続けていて、健康が回復してきている、と
 話されました。その方は、病気のデパートほど色々な病
 気をされたそうですが、最近、太りすぎていた体重も十
 キ口ほど減り、身体がとても楽になって来ているという
 ことでした。

四、この話を伺って、私はとてもうれしく思いました。
 ヨーガで健康になることは、まさしく現世利益ですが、
 ずっと続けていきますと、それよりも、もっとすばらしい
 利益が得られます。それは、たましいが救われて、安心
 立命が得られることです。そして、自分が明るくなり、

人を明るくできます。温和で、強い性格になります。直
 感力が鋭くなります。現実で誤らない判断力が得られま
 す。皆さんも、ぜひ毎日お続け下さい。

五、「オールポート『人格心理学』の『自己・他己理論』
 による克服とその発展」と題する四百字詰原稿用紙六十
 枚程度の論文を書きました。現代は、自然科学ばかりが
 発達して、人間のこころに関する学問は、二千年前もほ
 とんど変わりません。この分野の学問を発達させないと、
 結局人間は救われないように思えます。

月刊 こころのとも	平成五年八月八日 〒779 53
第四巻 八月号 (通巻 四十四号)	徳島県三好郡山城町国政八三四 ひびきのさと(清心者寺院) 心光寺 (沙門) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を 次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院 心光寺 口座番号 徳島9 53708	